

人間の傾向性

—モンテッソーリ教育から学ぶもの—

島田ミチコ（聖和大学）

はじめに

18世紀はルソ-(Jean Jacques Rousseau 1712~1778) ペスタロッチー(Johann Heinrich Pestalozzi 1746~1827), フレーベル(Friedrich Frobel 1782~1852)といった巨匠がきら星のように輝き、教育界の全盛時代であった。それまでの“子ども観”は見直され、無能な存在から有能な存在へと180度転換したのである。その能力は潜在能力(表に現れず、内部に目立たなく存在する能力)とか、本能(生まれつきもっている能力)といった言葉で表現されることがあるが、モンテッソーリ(Maria Montessori 1870~1952)は、著書に“傾向”という言葉をししば使っている。傾向とは、人間としての傾きのことであり、人間の性質や状態が一定の方向に傾くことである。この傾きは人間としての特徴であり、万人がもっているものである。これをモンテッソーリは“人間の傾向性”と呼んだ。この傾向性の内容とはどのようなものであるのか検討を試みた。

1. 傾向性とは

傾向性とは、人間が生まれながらにしてもっている人間としての傾きで、どの民族にも共通しているものである。人間は国によって言語、習慣、宗教など異なった文化をもっている。そうした歴史、文化の違いの中にあっても、人間として全ての人々の中に共通の特徴を見いだすことができる。その特徴は自然的な方向への傾きであり、モンテッソーリはこれを「人間の傾向性」と呼んだ。この傾向性は、人間の身体面、心理面に応えるものであり、この傾向性が原始の人間を今日の人間にまで導いたのである。

2. 適応の傾向性と探求の傾向性

誕生してきた子どもに、まず必要となる傾向性は、適応の傾向性と探求の傾向性である。人間の子どものは、生まれながらにして備わっている種としての固定された行動というものはない。そのため吸収する精神の力をかりて、自分の生まれた環境に適応し、個人的な作業によって人格を形成していかなければならないのである。この傾向性は生まれる以前の胎児の時から始まっているとモンテッソーリはいう。胎児は母体という環境の中で動いたり、聞いたりしながら活動を始める。しかし、誕生後は母体と異なった環境の中で自

分を適応させなければならない。そして、生まれて間もない時から探求心という傾向性を体を使って具体的に表すようになる。まだ寝返りのできない乳児でも天井などを見ることから探求を始め、手が使えるようになると身の回りにあるものを触ったり、つかんだりしながら熱心に観察する。このように子どもは未知の世界に対して知りたい、学びたいという欲望があり、知っている以上のもの、見えている以上のものへと向かって行き、その衝動が探求心を益々旺盛にしていく。そして探求すればするほど環境を認識し、その環境に適応することが可能になる。このように観察、探求を繰り返すことにより、身近な環境を認識し、認識すればするほどより一層環境に適応することができるのである。

「子どもは発達過程の中で身体的発達、知性、言語などを獲得するばかりでなく環境に適応することにより自分の存在を築き上げていく。子ども特有の精神形態の威力はここで発揮される。子どもは大人とは異なった形で環境との関係を保っている。大人は環境に驚きを示したり、後でそれを思い出したりすることもあるが、子どもはそれを自己の中に吸収する。子どもの場合は見たものを思い出しはしないが、見たものが精神の一部を形成する。見聞きするものが自身の内で血肉となるのである」(創造する子ども p62) このようにこの期は子ども特有の精神形態を発揮しながら鋭い感受性でもって環境に適応しているのである。子どもは生まれた場所がどのような所であろうとも、そこを愛し、適応していく。これは万国共通の人間に与えられた傾向なのである。したがって第一期の傾向性は適応と探求にあるといっても過言ではないであろう。

<適応性、探求性の土台となるもの>

子どもが環境に適応するためには、子ども自身が外界を探検することが重要である。そのためには探検できるような方向づけが必要であり、その方向性を導くためには環境の中に“秩序”がなければならない。何がどこにあるかということが認識できていなければ、その環境の主人となれず、安心して探検することは困難である。したがって“秩序”が適応にとって一番の土台となるのである。

3. 交渉する傾向性

人間は一人では生きて行くことは出来ない。社会の一員として共同体の中で適応していかなければならない。そのためには他者と意志疎通をはかり、理解を深め、信頼関係を築いていく必要があった。その手段として原始の人々は象形文字を編み出し、長い時を経て言語を発達させてきた。私たちは先人たちが作り上げて来た言語を使い、さらに表情や動作を加味してより明確に伝達できる方法を編み出してきた。

乳児は、話すことが出来ない時期から表情や叫びによって回りの人々と交渉しているが、成長するにつけ旺盛な吸収精神によって自分の国の言語を身につけるようになる。そして国の一員として人びとと意志疎通をはかるようになるのである。

この言語の発達によって、出会った人々とは話し言葉で、遠くの人々とは書き言葉でもって交渉することができるようになった。更に、生きた証しとして形あるものを次の時代に残したいという自然な交渉傾向から、時間や空間を越えて、次の世代へと文化を伝達してきたのである。原始の時代から今日の文明にまで発達できたのは、この交渉する傾向と言語の発達に帰する所が非常に大きいのである。

4. 空間・時間のオルガナイズ

人間の歴史をたどると、原始時代に種をまくことにより収穫することをおぼえた。そこで農耕が始まり、民族の定住が生まれた。そして人々は生きるための空間をオルガナイズする必要が生じてきた。自然から人間に与えられた最初の形は月、太陽、地球など円(球)であるように、最初の住家は円形(球形)であった。人間は空間に定着すると、空間をいくつかに仕切る作業を始めるようになった。つまり手や足を使って長さを測定するようになったのである。空間の環境をコントロールするための測量方法は、いかなる民族においても共通の傾向であり、論理的・数学的思考の原点とも言える。さらに、円形の家から次第に三角形、四角形など多くの形を生み出し、幾何を発展させていった。このように人間は空間をオルガナイズし、コントロールする傾向性を持っており、そのことが言語や数学の分野をも発展させていったといえる。

一方、時間をオルガナイズすることは非常にむづかしい。なぜなら空間はとどまっているが、時間は常に流れ、通りすぎていくからである。人間は2つの大切な時間を持っている。それは人生の最初(誕生)と、人生の終わり(死)である。生から死にいたるまで自

然界の四季折々の変化の中で、さまざまな体験に出会いながらも、生きるために必要な仕事、人間関係など雑多な用事を1日の時間の中で、あるいは週、月、年などのスパンで時間をオルガナイズして来た。

5. 抽象化と想像力

人間は心身一体の存在であり、人間の活動は精神に司られている。それは歴史の進化の中に見ることができる。人間は生きる必要性から測定や比較を行い、秩序を形成し、更に文字を生み出し、あらゆるものを抽象化してきた。人間の精神は直接目に見えないものでも頭に思い浮かべる想像力があり、さらに多くの事物から一つの特性(色、形、大きさ、アルファベットなど)を抽出することができる。こうした能力は抽象化へと向かう精神の生まれつきの傾向であるという。抽象化と想像力という精神の特性は、事物を認識する以上に新しいものを創造することを可能にするのである。こうした精神作用の土台となるのは「正確さ」と「秩序」である。この正確と秩序に裏打ちされた抽象化と想像力はやがて数学的頭脳を発達させ、論理的思考へと移行するのである。特に保育場面においては環境の中に事物が秩序だっているか、また事物を正確に観察できるかが重要な要素となるであろう。

6. 宗教性、精神性への傾向

マリオ・モンテッソーリは、人間は最終的には宗教性、精神性への傾向を示すという。ここで言う宗教性とは歴史的な仏教あるいはキリスト教といった特定の宗教ではなく、宇宙の中で見えるものから見えないものへと探し求め、体験以外に生じてくる出来事に対して感受性をもって受けとめ、何かにすがりたいという気持ちを抱くようになる。自分よりも上の存在を求め、何かから守られているという安心感を得ようとする。そして自分をより向上させたいという気持ちから、個人を完成へと向かわせるものが宗教性である。しかし、その根底には「愛」が必要である。

7. まとめ

人間の傾向性は向上に向かうものであり、原始から今日にいたるまで築き上げてきた。この傾向性は発達段階の過程においてある一定の時期にだけ特別強い力が現れ、これを敏感期という。教育の目的が世界平和であり、生命の援助であるならば、言語、宗教といった文化を越え、すべての子どもに与えられている傾向性にどれだけ応えられるかが問題となるであろう。